なかつたもので、其の宗教建築などは遙に此處に迂回をさす程の物ではなかつたらしく、裝飾なども案外幼稚であつたものと思はれる。西域記を見ても、法師は矢張り東に進み迦畢試の首都に向つたもので、東南カーブール方面に進んだものとはなつて居らぬ。

前記兩路の他の一線は此の地點では現在のトルキスタン本道となるもので、右に折れてカーブールに行く前述の近道と分れてからは、兩側に聳える巖の斷崖に挾まれて風景絶佳なる一聯の隘路となりバーミヤーン川に沿うて進み、暫くの間は東北クンドズの方向にも屈折してゐるが、バーミヤーンから第二宿に當るシュンブール Shoumboul で東の方から流下する細流に沿うて谿谷に入り、比較的緩除な坂道となつてシーバル Shibar 峠(標高三〇〇〇米突)の西傾斜面を登つてゐる。玄奘法師が越えたと云ふ「黑嶺」、彼れの傳記に依ると道に迷ふたやうにも思はれる其の山は、此の邊の稜線中にあるものと認むべきである。此の稜線は左程高くはないが、それでもオクサス Oxus, インダス Indus 兩流域の分水嶺となり、法師の時代にはバーミヤーン王國とカピシャ國屬嶺